『モルフィ公爵夫人』における主権権力者の身体： 再生産的未来主義に抗して

米谷 郁子

邦文要旨

初期近代イギリス演劇の鉅脈の中から、17世紀初頭の悲劇の名作『モルフィ公爵夫人』を取り上げ、作中に出てくる「狼」や「狼男」のモチーフがどのような意味の可能性を開き、どのような問題を明らかにしたのかについて論じる。主人公の公爵夫人の双子の兄であるファーディナンドは、自らは独身を保ちつつ、身分の低い男と秘密結婚をした公爵夫人を迫害し殺害することで、最後には「狼病」となって破滅していく。そのさまには、再生産的未来主義によって成り立つはずの異性愛規範社会に背を向けて生きる独身者としての主権者の側面と、社会から排除され他者と化し、死んでも哀悼されない「ホモ・サケル」となる主権権力者の側面との、両面が見られる。建国神話と国政衰退の相反する両義性を体現する狼の、その獣性を帯びた「狼男」は、「剥き出しの生」をもつ「ホモ・サケル」として、主権権力者の地位から堕ちていく。社会秩序の欠如や墮落した政治を批判する文脈上に表れる「狼男」の表象によって、ルネサンスが発見した「人間（性）」の持つ価値やその価値に基盤を置く異性愛社会の絶対善が疑問に付き、再考に付されるのを目にする事ができるだろう。

Against Reproductive Futurism: Sovereign Body in John Webster's *The Duchess of Malfi*

Ikuko Kometani

Abstract

Political life in the West, Giorgio Agamben claims in his influential discussion of sovereign power and bare life, has always been biopolitical life and the life of sovereignty appears inextricably linked to the life of the body. The aim of this paper is to trace some related aspects of the life of sovereign body in one of the plays that formed the rich textures of Jacobean drama, John Webster's *The Duchess of Malfi*. I explore what might be referred to as the margins of the political subject: the zone in which bodies are woven into the social fabric and from which they attempt to tear themselves, often in extremely violent and almost brutal ways. The border or the threshold these bodies aspire to cross, I claim, becomes especially visible in Ferdinand, the figure that at crucial moment in the play becomes associated with the beast: a body that is out of control and that can find no active place in a politically organized system. Through the powerful image of the body politic, *homo sacer* in the heteronormative society established on the basis of reproductive futurism, and the Duchess' pregnant body, the play further participates in a political discourse in which the life of the body is revealed as central in the definition of what Agamben calls the politically qualified life.

Key Words: Jacobean tragedy, animal, sovereign, werewolf, bare life, *homo sacer*

はじめに

イギリス文学史では、16世紀後半に花開いた初期近代イギリス演劇が、それまでの「神」の恩寵を描く演劇から「人間」の内面を描く演劇へ移っていったとして特徴づけられる。17世紀前半演劇ではその中心テーマが「動物」と（しての）人間となり、さらに17世紀後半には「機械」と（しての）人間になった、と言えるのではないか。このような演劇史上の見取り図を論証していく道筋の上において、今回は17世紀初頭の代表的なイギリス演劇1作品を選び、作品中で異性愛中心社会における婚姻制度や法秩序から外れていく主権権力者 (sovereign) のありようが「獣」に接近していく過程を論じる。とりわけ、近代社会に生きる人間たちが不可避的に生産し、そして追放する「内なる他者」として、「狼男」に変身する主権権力者に関する考察を行う。なお、ここで言う「狼男」とは 'werewolf' の和訳で、第一義的には「オオカミになった〔変身することのできる〕人間、狼男、狼憑き (cf. lycanthropy) ; (狼人間のように) 残忍な人 [OE *werewolf* man wolf (*wer* man; cf. VIRILE)]」(『リーダーズ英和』) という意味である。本稿でも、「狼男」という言葉をこの意味で使う。

理論的枠組み(1) — 主権、暴力、ホモ・サケルとその射程

ジャック・デリダは、『動物を追う、ゆえに私は(動物で)ある』や『獣と主権者』などの晩年の著作において、西欧の「ヒューマニズム＝人間中心主義」の歴史の中で人間と動物の間に引かれて来た典型的な対立を再考に付した。人間は、理性や言語、技術、喪の仕事、責任能力を「有する」存在として動物と区別されてきた。この文脈では、動物はそうしたものの欠如によって規定される。けれども動物に欠如していると人間がみなしてきた無数の能力が、そもそも人間に本当に備わっていると言えるのか。そして人間は、それらを厳密に「有している」とみなせるのかどうか。ここにデリダならではの脱構築が徹底的に施されたわけである。『獣と主権者』において、デリダはこの議論を「国家主権」と接続した。「主権」とは、ラテン語の前置詞 *super* (上に) に由来する言葉で、「その上に何ももたないもの」を意味する。¹ ジャン・ボダンの『国家六書』(1576年)における「主権とは国家の絶対的かつ永続的権力である」という定義以来、主権は国家が持つ至高の権力であるとされてきた。この『国家六書』が出版されたまさにその年に、イングランドでは最初の劇場「シアター座」がオープンしたのである。「主権」の概念と劇場がほぼ同時に出現したことは、以降の議論にとって興味深い歴史的事実である。デリダはこのジャン・

1 OED 'sovereign' sb.1.c. にあたる。本稿における 'sovereign' の定義は、OED sb.2.a. 'The recognized supreme ruler of a people or country under monarchical government; a monarch; a king or queen.' の意味を第一義とし、これ以外の意味が生じる都度に説明を加えることとする。

ボダンとバンヴェニストの語源学的考察を参照しつつ、主権者を「それ自身として、同じものとして、自己と全く同じものとして存在する権力と力、そうした者として認められる権利と力を持つ者」と規定している（『獣と主権者Ⅰ』p.34）。郷原によれば、「主権はこうした自権性のもっとも純潔で強大な状態であるがゆえに、脱構築の特権的な対象となるのだ。デリダの脱構築は、その当初から政治的な射程を秘めていたのである」（141）。この主権者のふるう権力は、「もっとも純潔で強大な」ものであるがゆえに、時に人民に対してふるわれる暴力の形を取って来し、また文学作品の中では特にその傾向が強かった。このことの例を17世紀初頭のイギリス演劇作品における主権者の姿に見ていく前に、やはりここで主権権力者である人間の「暴力」をどう考えるか、動物との関わりから考えておきたい。

人間は社会の中に自らを組み入れるにあたって、社会によって認可された欲望を自己の欲望として自己の内に取り入れ、認可されない欲望を自己の外に投射する。社会もまた同時に、自らのうちに組み入れるにふさわしい個人を選別し、組み入れるにふさわしくない、つまり望ましくない個人を「自らの外へと排除すべきもの」として名指した上で住ませる。そこで必然的に、「望ましくないとされたもの」の他者化という作用が生じ、差別や排除や迫害の暴力がふるわれる。「他者化」された存在は「ホモ・サケル」となる。「ホモ・サケル」とは、古典古代ギリシャ・ローマの法典から援用してジョルジョ・アガンベンが同名の著書で展開した概念で、社会を構成する市民によって「人」とはみなされず、ゆえに殺害可能な人々、しかもその死をなんらかの犠牲に供したり哀悼したりすることを禁じられている人々のことを意味する。アガンベンによれば、ホモ・サケルの生とは、「生物学的な生」(zoē、ゾーエ)あるいは元々ヴァルター・ベンヤミンの造語である「剥き出しの生」のことで、社会的に認可され組織化された「生の形式」(bios、ビオス)に統合されない生のことである。本稿にとって重要だと思われる点は2点ある。ひとつは、「剥き出しの生」を生み出す生政治＝バイオポリティクスが後期近代に生じてくるものではなくて、古典古代から近代創生期に見られてきた「剥き出しの生の政治化 (polis、ポリス・都市国家、そこへのzoēの包摂)」によって生じてきたものであるというアガンベンの論点の基本線。それからもうひとつは、アガンベンがホモ・サケルに注目することによって、「死の問題」を前景化した点である。ホモ・サケルは「人にあらざるもの」であるがゆえに、その死が人間社会の中に位置づけられることはない。デリダも『欲待について』の中で、異邦人はその生まれによってではなく、その死の追悼が「いかに行われぬか」によると述べている。周知のとおり、デリダは『獣と主権者』の中でアガンベンの「ゾーエ」と「ビオス」の切り分けに関して痛烈な批判を展開しているが、デリダにとっての「異邦人」とは、この点においてアガンベンの「ホモ・サケル」に接近していると言える。

初期近代から現代にかけて、生政治が剥き出しの生をますますその中に抱え込むと、同時にその剥き出しの生をますますヒステリカルに放逐しようとすることによって、「生の

政治」は必然的に「死の政治」を前提とするようになる。²人間の生を規定し管理しようとする生政治が、「死の政治」という様相を露わにしていく点への注目において、デリダとアガンベンは共通していると言えよう。望ましい欲望の「取り入れ」と望ましくない欲望の「排除」の社会システムに過剰適応した身体は、ビオス（＝社会的に望ましい生）を追及してゾーエ（＝社会的に望ましくない生）を排除しようとする運動に従事するわけであるが、まさしくこの運動が皮肉にもゾーエを生みだしてしまい、ビオスとゾーエの罅が不明になった例外状況の増殖、戦争状態の遍在化が起これるとアガンベンは論じるのである。

ただ、そうなると実際にホモ・サケルを追放する者・殺害する権力を持つ側のアイデンティティも揺るがされるはずだが、この点についてアガンベンは考察していない。また、ホモ・サケルという言葉は歴史的な負荷のかかった用語であるために、考察の対象となる個々の事例の歴史的背景においてつぶさに文脈を踏まえていく必要があるのは勿論のことである。例えばアリストテレスの古代ギリシャ時代には、ホモ・サケルは公的社会から締め出され、「プライベートな世界」すなわち「(子供を産むという次代再生産をめざすだけの) 家庭・オイコス」の場に「閉じ込められる」存在という意味合いで用いられていた。そこから発するアガンベンの論考も、「(女・奴隷・子供の存在の不可視化によって成り立つ) 近代市民社会の異性愛体制へと最終的に横滑りしていくプライベートな場＝家庭」のセクシュアルな側面に対して無批判であり続けるという、理論上不十分な点を持っていると思われる。

17世紀のイングランドの演劇では、主に婚姻制度によって保障される次代再生産の称揚³と、それによって立ち現れる婚姻可能で多産な身体は喜劇の関心事でありつづけた。他方で同時代の悲劇では、「王位継承とその破綻」が政治的社会的不安と結びつく形で、再生産への過剰な欲望を備えた身体への不安や、逆に性的に不能な身体への不安のモチーフが取り上げられた。前者の不安の例として、シェイクスピアの『ハムレット』における、オフィーリアやガートルードの再生産可能な性的身体に対するハムレットの不安や恐怖があるし、後者の不安の例としては、『マクベス』におけるマクベス夫人の狂気が挙げられる。本稿では、ウェブスターの『モルフィ公爵夫人』のファーディナンドを考察の対象としつつ、主権権力者の政治的主体の周縁・終焉として言及される領域を考察していく。とりわけ主権者の身体が政治的に組織化された社会構造のなかに織り込まれながらも同時に自律

2 これをアブグレイブ刑務所の問題との関連から論じたものとしては、竹村和子の議論を参照。

3 本稿では、これを異性愛規範の下で次代再生産 (heteronormative reproduction) に基づく再生産的未來主義 (reproductive futurism) と呼ぶことにする。これはもともと、Lea Edelmanの作り出した用語で、エーデルマン自身は、「子供を産み殖やし育てることが無条件に善とされ、それによってはじめて保証されるような未來社会像」(およびそれによって抹殺される性的マイノリティの未來のなさ・苦境) という意味で使っている。

性を失っていく様子や、狂気を帯び制御不能となった主権者の身体が社会構造から自らを暴力的・獸的なやり方で引き離す際に現れる「狼男」の両義性について考察したい。主権者自身が、社会的に望ましいとされた再生産的未来主義に反する生き方をすることによって、これら二つの悲劇の底には次代再生産のシステムによって継承されていく社会の矛盾がひそんでいるということが一つ。その矛盾を体現する存在として、セクシュアリティや再生産的営みに敢えて触れまいとする、潔癖という以上に肉体そのものを避けるような生理的な嫌悪感、「子孫を再生産することによってこそ社会という地に根をおろして暮らすと見なされる」社会的イデオロギーへの反感や恐れと、それを傲然と言いつつ者が味わわなければならない痛みや懲罰を、孤独な狼男として描いているという点がもう一つ。この二つの主張を立てて論じていきたいと思う。

理論的枠組み（2）— ルネサンス演劇との関わり

スーザン・ワイズマンが既に指摘している通り、ルネサンス期の“creature”、すなわち創造物・狼にまつわる政治的両義性の考察は、古代ローマ建国におけるロムルスとレムス神話に潜む両義性を背景として出てきたものである。ロムルスが兄弟殺しによって「獸性」を表すというのなら、その獸性の源を私たちはどこに求めればよいのだろうか。人間に棄てられた幼児を狼が育てるといふ慈悲の行為によってその狼が「人間」的な美徳を備えた獸となるならば、ロムルスは兄弟を殺した故に「非—人間」、すなわち「人間」とは似ても似つかぬ獸であると、単純に言えるのだろうか。そしてこれが都市や国家の設立に対して何を意味するのだろうか。“Nature”（自然・本性）と“Nurture”（養育）の語りの両面に両義的に関わっているロムルス・レムスの神話は、ローマの「建国神話」の語りであると同時に「国政の衰退」の危険性を最初から孕む兄弟殺しの語りでもあるという両義性を持つ。『ホモ・サケル』の中の“The Ban and the Wolf”という章の全体を通じてアガンベンが述べた通り、獸性は「剥き出しの生」として、政治的領域である都市の中心部分に、常に既に排除されながらも棲まわっているのだ。ビオスがゾーエを排除しつつ包摂しコントロールするように見えることで、ビオスとゾーエは常に相互補完的な関係であるために、その関係性は区分不能性に陥り逆転する運命にある。狼男の姿は、この「政治都市の生」とそこで排除されつつ包摂される「人と獸の間の生」、アガンベンの言葉を借りれば、人間たちの住まう街に住みながら獸の住まう森とも行き来するような、「町と森の間」の属性を携える存在として出現する。

本稿で考察の対象とする初期近代イギリス、とりわけジェームズ朝悲劇は、そもそも「例外的に」法的秩序の内側と外側の両方に存在しつつそれを超越していた孤高の「主権権力者」である君主自らが、孤独な狼男となる（あるいは自らが人間でも獸でもない、つまり人と獸の両方の領域に属しながらそのどちらからも排除される存在）姿として表象する作

品が多い点で、非常に興味深い。狼の世界に緊密に結びあわされた主権者については、「法的秩序の内側と外側に同時にいる存在」として、デリダも『獣と主権者』の中で言及している。

この時代に「狼」と「狼男」がいかに注目されていたのかを示すために、ジェイムズ朝イングランドで流布していたオオカミに関する言説をいくつかリストアップしてみる。同時代の動物誌資料として代表的なものは、Edward Topsell の *Historie of Foure-footed Beastes* である。この中でオオカミは、まず、社会や人との交わりを避ける孤立した生き物であると書かれている。

[a]ll Beastes both great and small do auoyd their society and fellowship, for it cannot be safe for strangers to lieu with them in any league or amity, seeing in their extremity they deuour one another. (Topsell, 744)

また、オオカミは「娼婦」と結び付けられる。

Lupa and lupula were the names of noble deuouringe Harlots, and from thence commeth Lupanar for the stewes. It is doubtful whether the nurse of *Romulus* and *Remus* were a harlot or the Wolf, I rather thinke it was a harlot then a Wolfe that nursed those children. (Topsell, 734)

ここで、ロムルスとレムスの乳母が「娼婦」だったのかオオカミだったのかという議論がさしはさまれているのが興味深い。さらに、オオカミは野性的で貪欲、血に飢え残虐で、誇り高く陰鬱に沈んでいるという性格描写をほどこされることによって、人間的な性格を付与されていく。

Concerning the naturall disposition of this beast we haue already spoken in part, and now we wil adde that which doth remaine; and first of al their Epithites which are attributed vnto them among seueral Authors are most cleare demonstrations of their dispositions; as wilde, sharp, fierce, bold, greedy, whoare, flesh-eater, wary, swift, bloody, blood-louer, degenerate, hard, glutton, hungrie, Cattle-eater, famishing, furious, yellow, fasting, ungentle, unhoneſt, untameful, harmefull, Cattle-hurter, teeth-gnasher, insatiable, treacherer, martial, sorrowful, mountainie, nightly, robber, strate, rauener, mad, snatcher, cruel, pack-bearer, blood-sucker, proud, fearing, sullen, terrible, vehement, howling, and such other like belonging to the male wolfe. (Topsell, 745)

同時代の奇書『憂鬱の解剖』の著者ロバート・バートンも述べた通り、ウェブスター作『モ

『モルフィ公爵夫人』に登場する君主ファーディナンドに見られるようなエモーショナルで直情的な状態は、ジェイムズ朝当時は障害や異常性として見なされていた。このような性格の人間は為政者にはふさわしくないと、当時は政治批判の対象でもあった。バートンは、次の引用に見られるように、狂気とメランコリーとを区別した後に、Lycanthropy（狼病）を狂気に分類していく。

[M]adness is defined to be a vehement dotage, or raving without a fever, far more violent than melancholy, full of anger and clamour, horrible looks, actions, gestures, troubling the patients with far greater vehemency of both body and mind, without all fear and sorrow. [...] [L]ycanthropia, which Avicenna calls Cucubuth, others Wolf-madness, when men run bowling about graves and fields in the night, and will not be persuaded but that they are wolves, or some such beasts. Atius and Paulus call it a kind of Melancholy; but I should rather refer it to Madness, as most do. (Burton, 122)

孤立した存在。娼婦のような存在。残忍で「人間らしくない」性格を持つ存在。病気と狂気のはざまにいる狼人間。オオカミから抽出されたこれらの特徴はすべて、社会の中でマイノリティとして生きる存在の属性でもあるのだ。

『モルフィ公爵夫人』の場合

それでは、ジョン・ウェブスターの名作『モルフィ公爵夫人』には、「狼」はどのように出てくるのか。

若く美しく賢い未亡人、モルフィ公爵夫人は、自分よりも身分の低い家令アントーニオに自らプロポーズをして、周囲には秘したまま再婚し、ひたむきに夫を愛してやまない女として生きようとする。いっぽう、公爵夫人には二人の兄がいる。ひとりには緋色をまとった枢機卿で、僧職の身にありながらも性的に放縦であり、情婦で人妻のジュリアを囲う人物。もう一人はモルフィ公爵夫人と双子の関係にあたるファーディナンドであり、地位・権力ともに最高位に立つ人間でありながら、妹である公爵夫人への奇妙な独占欲に燃え、果てしなく墮落している。ファーディナンドに雇われて公爵夫人の動向を探るスパイ役のコゾラは、ファーディナンドの命を受け、公爵夫人がアントーニオの子供を妊娠したという情報を得て、公爵夫人を捕えて狂気へと追いやろうと残忍な手立てを講じていく。コゾラはもともとガレー船の水夫として地をはいずり回るような境遇を生き、知的センスと教養に優れながらも出世には恵まれず、やりきれない不満に身を溺れさせていて、人を裏切ることで生き延びてきた人物だが、やがて最も信頼していたファーディナンドに裏切られることで初めて、自分が自分を一番裏切って来たことに気づく。コゾラは最後に良いこと

をしようとして、ファーディナンドによって迫害され幽閉された公爵夫人とアントーニオを助けるつもりが、結局は自分の手で殺してしまう。ボゾラ自身もファーディナンドに殺されてしまう。最終幕では、枢機卿、ジュリア、そして「狼病」に憑りつかれて発狂したファーディナンドも、皆揃って天罰が下ったかのような最期を遂げる。

『モルフィ公爵夫人』の中で、“sovereign”な主権権力者としての地位を保つ公爵夫人の政治的な地位は、常に「至高の (sovereign)」(1.1.395-396)と形容される結婚指輪に象徴される「婚姻」、それに妊婦の身体が可視化する「再生産」可能性と結びついている。⁴ 公爵夫人のアイデンティティは、「陽気な未亡人 (lusty widow, 1.1.331)」と表現されながらも、常に兄のファーディナンドと同じく「a prince (君主・王侯貴族)」として表される。「遺書を作る」と言いながらアントーニオに求婚する場面での使用例を見てみよう。

公爵夫人 (アントーニオに向かって)
私は遺書を作ろうとしているの、王侯貴族は
記憶がたしかなうちにそうするものでしょう (1.1.367-368、下
線は筆者による)

「いつかは私たちの秘密結婚も兄たちの知るところになるけれど、兄たちに認められるまで、これ以上子供は生まないことにするわ」という台詞を、他ならぬファーディナンドに聞かれてしまい、静かに開き直る場面では：

公爵夫人 (ファーディナンドに向かって)
私の運命が生であれ死であれ、王侯にふさわしく
りっぱにやってみせるわ。(3.2.71-72 同)

この公爵夫人に対して、ファーディナンドはすかさず切り返す。

ファーディナンド では死んでもらおう、いますぐ！
貞操よ、どこに消えた？どんな忌まわしいものが
おまえをおおいかくした？(略)
それとも貞操とは名ばかりで実体のないもの、
というのは本当か？ (3.2.72-75 同)

4 原文からの引用は John Webster, *The Duchess of Malfi*. Revels Plays Series, を使い、引用末尾に幕・場・行数を記す。『モルフィ公爵夫人』からの引用はすべて小田島雄志訳 (白水社、1996年) の訳を使うこととする。

Ferdinand Or is it true, thou art but a bare name.
 And no essential thing? (3.2.74-75 同)

ここでは、「王侯」としての公爵夫人のアイデンティティはすぐに「貞操」、しかも「実体のないもの (bare name)」とイコールにされていく。そして、「再生産」可能な身体は「王侯」「主権者」たる princely な公爵夫人のアイデンティティと不可分のものとして表されている。公爵夫人が生きるヘテロノーマティヴな愛の世界は、“prince”としての公爵夫人の身に着ける“sovereign”な結婚指輪に象徴される「秘密の婚姻」によって象徴され、芝居全体を通じて基調となり、お芝居の間に彼女は実に3人の子供の母となる。Lynn Enterline が述べている通り、主にボゾラのミソジニックな視線を通じて、私たちは公爵夫人のゆったりとした衣装、膨らむ体型や妊娠の進行によって変わっていく嗜好等を注視させられていくのだ。まさしくこの「ヘテロノーマティヴな再生産」への生理的嫌悪こそが、もう一人の“sovereign”である兄のファーディナンドを悩ませるものとなっており、それは彼女の妊婦の身体をおぞましく病的なもの (2.1.60) であるとするレトリックによって提示されていく。秩序立った政治が行われれば、宮廷の身体政治は「一般庶民にとっての泉であり、そこからは澄みきった銀のしずくが広く世に流れ出す (1.1.12-13)」はずだが、同じ論理の直接の反転によって、彼らの宮廷は「忌まわしいお手本がその源近くを毒すると、国全体に死と病を垂れ流して」(1.1.14-15) しまうものとなっている。秩序を失い病的となった社会と人の「悪徳」は、獣と人間のイメージの混合として語られる。

ボゾラ 人間ってやつは、その姿形に愛すべきところが一つでもあるか？そのくせ人間に似た子馬や子羊、子鹿や子山羊が、この世に生まれてみろ、なにか不吉なものと考え、化け物でも見たかのように逃げ出すだろう。人間ってやつは、自分以外のけだものに自分の奇形を見つけると、肝をつぶすんだ。そのくせ自分のからだには、けだものの名前のついたものをいっぱいくつつけている、ネコ背にシシっ鼻、心ゾウにかさブタってね。そしてシラミやウジムシに食い荒らされてるくせに、死んで腐った肉体をたえず身にまとってるくせに、そいつを豪華な薄衣にかくしていい気になってるんだ。おれたち人間が気にするのは — いや、恐れるのは — いやな臭いを消すために、医者がおれたちを

さっさと地面に埋めやしないかってことだ。(2.1.41-56)

小田島訳では日本語での語呂合わせのために以上の訳になっているが、原文では上記引用下線部分は“*As the most ulcerous wolf, and swinish measles*” (2.1.50) となっており、ここに「狼」が出現している。家令ファーディナンドと公爵夫人の秘密結婚、つまり身分の低い者を貴族の身体に棲まわせる悪しき「混血」の結果として、人の病は獣の病となっていく。ボゾラにとっては、「子孫の誕生」に「動物的奇形」はつきものなのだ。公爵夫人の妊娠と結婚の一報に対して、ジュリアと性的関係を結ぶ枢機卿が沈着な反応を見せるのに対して、ファーディナンドは偏執的なまでに潔癖な反応に終始する。ファーディナンドの怒りに対する枢機卿の返答を見てみよう。

ファーディナンド 兄さんはおれのように
カーッと頭にきていないのか？
枢機卿 きておるさーだがわしは
そのように発作を起こさずとも腹を立てられるのだ。
途方もない怒りほど人間を醜くし、けだものに
近づけるものはこの世にあるまい— 自制するのだな。
(2.5.54-58)

ファーディナンドの感情の爆発は、その極端な情動の動きが「*bestly*」という言葉で非難されている。病める体、ディスアビリティとしての身体のスペクタクルと化したのは、妊婦としての公爵夫人の身体だけではない。彼女を取り巻く宮廷世界自体が、ゾエ的政治体として表されていることは注目に値する。さらに興味深いのは、公爵夫人もボゾラも、それぞれが「狼」的属性をファーディナンドと共に担わされて行くという点である。5幕でファーディナンドを診察する医師の台詞は以下のようである。：

医師 申し上げます。この病に
かかったものは、憂鬱症のもとである黒胆汁が
あふれ出すので、自分が狼に変身したと
思い込んでしまいます、その結果、深夜
こっそり教会の墓地に忍びこみ、死体を
掘り起こしたりするのです。たとえば
おとといの晩、真夜中ごろ、聖マルコ教会の
裏手の小路で、ある男が肩に人間の足をかついだ
公爵に出会いました。すると公爵は恐ろしい

うなり声をあげ、おれは狼だぞ、違うところはただ、
狼の皮は外側に毛が生えているのに、おれのは
内側に生えているだけだ、嘘だと思うなら
剣を抜いておれの肉を裂いてみよ、と言われました。(5.2.7-19)

この場面を見た観客はおそらく、1幕1場で既に「暗い憂鬱症 (foul melancholy 1.1.71)」に陥っていたボゾラの姿をファーディナンドと重ねることになるだろうし、また、同じ「狼」にまつわるイメージの中でもとりわけ娼婦のイメージが、公爵夫人によって分有されている。「みごとなハイエナ」として、古典古代より「オオカミ」と並んで「邪悪な生殖習慣」をもつとされた動物になぞらえられてから、公爵夫人の身体はひたすら「娼婦の母乳」「娼婦の血」(2.5.47-48)としてファーディナンドに言及される。リン・エンターラインは、公爵夫人とファーディナンドの関係における人狼病が男女双子の兄妹の近親相姦のメタファーであるとして解釈する。人狼病は、ファーディナンドの疎外された内面を表面に可視化したものであって、その死すらも、二人を差異化させるに十分ではないと論じている：

When her body signifies a desire different from his, Ferdinand kills her, for that such a body should be familiar, in oedipal terms, is horrifying: “that body of hers” dazzles cruel sore eyes; it is a root that shrieks when disturbed. But the Duchess cannot be finally done away with any more than the shadow Ferdinand tries to throttle, so her death in this play is no end . . . Even death does not mark difference enough between his form and hers: his figure for his lycanthropy speaks only of an alien skin, of an exterior surface turned into a now alienated interior. (Enterline, 120)

ここで展開されているエンターラインの解釈をトリコーミの解釈とあわせてまとめるならば、直接的にであれ比喩的にであれ、異性愛社会の中でタブー視された「近親相姦の禁忌を犯した人間」は獣と化し他者化するということだ。

ゲイル・カーン・パスターは、シェイクスピアのマクベスに見られる「心理主義と結びついた物質主義」としての現象主義と動物の比喩との関係に注目し、マクベスが自分を熊に例えているシーンについて以下のように論じている。

Because it is spoken by Macbeth about himself in relation to an environment made up of surrounding humans, the simile’s larger effects draw us into his state of mind—serving not to bestialize him but rather, as phenomenological figuration, to convey the heightened texture of his self-experience. (121)

きや狂気のモチーフが込められているのだという。5 幕で注目すべきは、やはり先に日本語訳で引用した次の台詞である。

[Ferdinand] [s]aid he was a wolf, only the difference
 Was, a wolf's skin was hairy on the outside,
 He on the inside. (5.2.15-17)

注目すべき点は、「内面」、つまりエモーショナルな心理状態が物理的世界における外見的リアリティを改変するという意味において、自らの狼へのアイデンティフィケーションに言及している点である。

「ジェイムズ朝演劇に登場する唯一の人狼」として、ファーディナンドについては既に神学、悪魔学、医学、民間伝承等さまざまな文脈から研究がなされてきている。21 世紀に入ってからの議論をここで手短かに振り返ると、例えば、「人間性と獣性の境界にたたずみ、人と動物の差異を曖昧にしているファーディナンドの病は、芝居の中では自然現象的な症例として医学的に扱われている」と論じたハーシュ、それに反してファーディナンドの病は「悪魔によるとり憑かれとして社会的文化的に解釈された現象である」と論じるトリコーミ、「政治的腐敗・専制政治の比喩である」として政治批評を展開するワイズマン等の議論である。ここでファーディナンドの病を「単身者たる為政者＝主権権力者の、次代再生産には結びつかない病んだ欲望の果て」として、セクシュアリティと欲望の側面から再考した場合に、人狼を「暴君」の政治的比喩として限定的に捉えられてきた近年の批評動向とは異なる側面が見えてくる。すなわち、国家の存続を可能にする「子孫の誕生」と、さらにそれを可能にする「女のセクシュアリティ」に対して、「生理的嫌悪」を表明することによって、自らの手で「国家の存続」を否定する君主、そのフィギュレーションとしての「狼男」である。

妹の再生産可能な身体を破壊した狼男ファーディナンドは「街」「社会」の中にいながらもはや誰とも交わらず、そこに棲まえない存在となり、最後には自らの影に身を投げるしかない。しかしながら、スーザン・ツイーママンの解釈のように、ファーディナンドの破滅をもって「彼の狼的・獣的な内面は（作品世界から）駆逐された」として、悲劇の物語をうまく閉じることもできない。なぜなら、「狼の子」(4.2.250-251)として言及される公爵夫人の二人の子供たちについて、作品の結末でアントーニオの友人デリオは、母の血を継ぐ者、すなわちファーディナンドの妹・公爵夫人の跡取りとして、新たな主権権力者の座に据えようというからだ。こうして、狼の血は、やはり「狼の子」にたとえられていたジェイムズ朝王室の子供たちと同様、権力者たる当事者たちの思ってもみなかったやり方で、継承されていくのである。

おわりに

生政治は近代市民の身体を生産するのみならず、返す刀でその範疇に入らない身体を、政治的身体 (body politic) 以前の身体 (bare life, 剥き出しの生) として排除・抹殺していく。生政治の裏側には、死の政治が貼り憑いている。自分にとって不都合な欲望を排し、社会的生 (ビオス) をより完璧に組織化しようとして、逆説的に社会的生以前の生 (ビオス) を増殖させるといふ生政治の二律背反性が見られるのは、まさにこの点においてである。

他者化と抵抗が表裏一体となって「狼男」としての主権者に具現化されるさまがバイオポリティクスのラディカルな輻輳性を表象しているのかどうかについては、未だ誰も確固たる検証を行っていない。そうしたポテンシャルな存在性については、シェイクスピアの『リア王』や『コリオレーナス』とりわけチャップマンの悲劇等のテキスト分析も必要になるだろう。近代の異性愛体制下での欲望の軸では説明できない人間の欲望と、法治社会の外部に遺棄され、再生産的未来主義に保証されたセクシュアリティによって脈々と受け継がれる血縁主義からも外れて死に接近した人間の「暴力性」が表象される際に見られる「動物」。社会や国家の強力なタガの中で閉じ込められていた暴力が、その留保を取り払われ、不定形に遍在して噴出しはじめ、秘匿されていた暴力の顕在化などの形を取る際の、動物と死の欲動について、今後も関連テキストを集めながら分析を行っていこうと思う。

参考文献

- Agamben, Giorgio. *Homo Sacer: Sovereign Power and Bare Life*. Trans. Daniel Heller-Roazen. Stanford: Stanford University Press, 1998. ジョルジョ・アガンベン『ホモ・サケルー 主権権力と剥き出しの生』高桑和巳訳、以文社、2007年。
- Burton, Robert. *The Anatomy of Melancholy*. 1638. Kila, MT: Kessinger, 1991.
- Cavell, Stanley. “Who Does the Wolf Love?: Reading *Coriolanus*,” *Representations* 3 (1983): 1-20.
- Chapman, George. *The Revenge of Bussy D’Ambois*, in *Four Revenge Tragedies*. Ed. Katharine Eisaman Maus. Oxford: Oxford University Press, 1995.
- Cormack, Bradin. *A Power to do Justice: Jurisdiction, English Literature, and the Rise of Common Law, 1509-1625*. Chicago and London: University of Chicago Press, 2007.
- デリダ、ジャック. Derrida, Jacques. 『動物を追う、ゆえに私は (動物で) ある』鶴飼哲訳、筑摩書房、2014年。
- 『獣と主権者 I (ジャック・デリダ講義録)』西山雄二 (他) 訳、白水社、2014年。
- Edelman, Lea. *No Future: Queer Theory and the Death Drive*. Duke University Press, 2004.
- Enterline, Lynn. “‘Hairy on the In-side’: *The Duchess of Malfi* and the Body of Lycanthropy.” *Yale Journal of Criticism* 7.2 (1994): 85-129.
- 郷原佳以. 「L’enfant que donc je suis、あるいは、猫のエピソードはなぜ「自伝的」なのか」『現代思想総特集— デリダ』2月増刊号 vol.43-2 (2015): 76-100.
- Hirsch, Brett D. “An Italian Werewolf in London: Lycanthropy and *The Duchess of Malfi*.” *Early Modern Literary Studies* 11.2 (2005): 1-43. <<http://ocloc.org/emls/11-2/hirswere.htm>>
- Kuzner, James. “Unbuilding the City: *Coriolanus* and the Birth of Republican Rome.” *Shakespeare Quarterly* 58.2 (2007): 174-199.

- Miller, Nichole E. "Sacred Life and Sacrificial Economy: Coriolanus in No-Man's-Land." *Criticism* Vol.51, No.2 (2009): 263-310.
- Paster, Gail Kern. "Melancholy Cats, Lugged Bears, and Early Modern Cosmology: Reading Shakespeare's Psychological Materialism Across the Species Barrier." *Reading the Early Modern Passion: Essays in the Cultural History of Emotion*. Ed. Gail Paster. Philadelphia: University of Pennsylvania Press, 2004. 113-129.
- 竹村 和子 Takemura, Kazuko. "Violence-Invested (non)Desire: Global Phallomorphism & Lethal Biopolitics" *F-GENS Journal* vol.3 (2005): 65-71.
- Topsell, Edward. *The Historie of Foure-footed Beastes*. London, 1607.
- Tricomi, Albert. "Historicizing the Imagery of the Demonic in *The Duchess of Malfi*." *Journal of Medieval and Early Modern Studies* 34.2 (2004): 345-372.
- "The Severed Hand in Webster's *Duchess of Malfi*." *Studies in English Literature* 44.2 (2004): 347-358.
- Webster, John. *The Duchess of Malfi*. Ed. John Russell Brown. The Revels Plays second edition. Manchester: Manchester University Press, 2009. 『モルフィ公爵夫人』エリザベス朝演劇集 III 小田島雄志訳、白水社、1996 年。
- Wiseman, Susan J. "Hairy on the Inside: Metamorphosis and Civility in English Werewolf Texts." *Renaissance Beasts: Of Animals, Humans, and Other Wonderful Stories*. Ed. Erica Fudge. Urbana and Chicago: University of Illinois Press, 2004. 50-69.
- Zimmerman, Susan. *The Early Modern Corpse and Shakespeare's Theatre*. Edinburgh: Edinburgh University Press, 2005.